

解説

鈴木三男¹：特集「クリ林研究」への招待Mitsuo Suzuki¹: An introduction to integrated studies on chestnuts
in the Jomon Period

我が国の縄文文化は実に1万年にもわたり最終氷期以降の地球温暖化の中で展開されたが、世界の石器文化の中で縄文文化を大きく特徴づけているのは、その文化が森林の中であって、森林を「やさしく」利用し活用し、文明文化の発展とともに森林も人と共に歩むように「進化」してきたことにある。いわゆる雑木林は人と森が強く結びついた、持続的自然の再生利用が可能であると同時に地球環境保全を果たす、理想的な生態系といえる。

縄文時代は人口が急激に拡大する縄文時代前期以降、晩期までを通してクリ材がもっとも多用され、まさにクリ文化ともいえるほどであったことは、多くの遺跡において大量のクリの果実（種子）が発掘され、また、大量の木材や炭化材がクリと樹種同定されたことから、多くの研究者が指摘してきたことである。

確かに、縄文時代がクリ利用で大きく特徴づけられることは間違いないが、主要な食糧源としてのクリの木の収穫と、重要な木材資源としてのクリ材の伐採は互いに矛盾することが、やはり以前から指摘されてきている。青森県の三内丸山遺跡では直径1 mを超えるクリの巨大木柱をはじめ、発掘された柱根はすべてクリ材であり、そのほか刳物や柱材、杭材などに大量のクリ材が使われるとともに、第6鉄塔地区の縄文時代中期の土層中から得られた大量の炭化材の8割がクリで占められることが明らかになった。同時にクリの炭化種子（クリの実）も大量に出土しており、やはり食料としての木の利用と用材及び燃料材としての利用が、同時に大量に、はかられていることが明白である。

このような大量のクリの木の継続的な存在を満足させる仮説として、縄文人によるクリの栽培が様々な側面から想定されてきている。その一つはクリの木の大きさの変化であり、もう一つは遺伝子多様性の斉一化である。野生植物に保護を加えると実が大きくなり、また収量が多くなることは一般に知られている現象である。縄文時代のクリが現在の野生のクリ（いわゆる芝栗）に比べて実が大きいは以前から指摘されてきており、これを縄文人による保護の結果と見なす考えがある。また、野生植物は集団内の遺伝子の多様性が大きい、人々が目的を持ってこれに選抜を加えて自らの目的にあった個体の子孫を育成するようになると遺伝子の多様性は減少して、斉一化してゆく。静岡大学にいた佐藤洋一郎氏は三内丸山遺跡や富山県小矢部市の桜町遺跡のクリの木の遺伝子多様性が少ないことから、これを栽培化の証拠としている。

このように、クリを縄文時代に「栽培」していた、もう一歩進んで「クリ林を経営していた」とする考えは状況証拠の積み重ねから一定程度の確からしさを持っているように見えるといえる。しかし、そこには常に、それらが成り立つための前提が確認されないまま仮説が膨らんで行き、あたかも「栽培」が証明されたかのように受け取られていっているのが現状である。人々が自然林のクリに手を加えて大量の実と材を継続的に得ようになる過程には、単に伐採の仕方をコントロールするものから、積極的にクリを播種、あるいは苗を植え、邪魔になる草木を取り除くなど、クリ林経営ともいえる段階まで、様々なステップがあり得ると考える。これを単に野生採取か栽培か二者択一的に決めつけることは、縄文社会の経済的な基盤を結局理解することが出来ないことになる恐れがきわめて大きい。

そこで、1) 現在の落葉広葉樹の自然林及び最近まで薪炭林として利用されてきた二次林にどれだけのクリが存在するかを群落生態学的に調査する、2) 縄文時代におけるクリの食糧資源および木材資源としての利用実態の集大成、3) 伐採方法の違いによるクリ再生の違いを明らかにすること、クリ林伐採後の管理、特に森林焼却の群落生態学および考古学的検証、4) クリの伐倒、截断、整形、樹皮剥ぎ、加工、搬出等の仕事量算出のための実験考古学的検証およびクリの植物季節と作業カレンダーの解明、5) クリ材使用各種建築物の使用年数算定による、クリ資源再生サイクルのスパンの特定、6) クリの木の生産量の継続調査によるクリの食糧資源としての評価、7) 遺跡出土クリの形態比較とDNA解析による植物地理学および分類学解明、8) クリのSSRマーカーによる遺伝子多様性集団解析の全国展開および化石DNAへの適用、9) 北海道のクリ巨木集団の分子遺伝学および考古地理学解明、10) 栽培環境下のクリの年輪成長解析、などを目的に、「クリ林研究会」をつくり、日本学術振興会による科学研究費補助金（基盤研究B）「縄文時代のクリ林利用とクリ林再生管理に関する考古生態学的研究」（平成12～14年度、研究代表者：鈴木三男）および青森県教育委員会による三内丸山遺跡

¹ 〒980-0862 仙台市青葉区川内 東北大学大学院理学研究科附属植物園

Botanical Garden, Graduate School of Science, Tohoku University, Kawauchi, Aoba, Sendai 980-0862, Japan

特別研究「縄文時代におけるクリ資源利用と資源再生に関する総合研究」（平成13, 14年度, 研究代表者：鈴木三男）を受けて, 研究を展開した。この研究会には科学研究費や三内丸山特別研究のメンバーで有る無しに関わらずクリに関わりがある実に多方面からの方々に参加してもらい, ミーティング, 研究会, そして現地調査, 伐採実験等を行った。

そして, その成果については, 然るべき専門誌にそれぞれが発表することとし, 「縄文ークリ」に焦点が集まる問題については, まさにその様な問題を主テーマとしている『植生史研究』誌上において発表するのが望ましいと考え, ここに「特集」のような形で原著論文3本, 解説1本を掲載していただくこととなった。

研究会の成果はこれに留まらず多岐にわたり, それらはそれぞれ別な形で印刷公表すべく努力が行われているが, 専門誌での原著論文では一般の人に目に触れることがないため, クリ林研究会の成果のエッセンスをかいつまんで, しかも平易に書いた本の出版も企画している。これらが縄文時代とクリの問題の理解とさらなる研究の発展の基礎となることを念じている。